

漢法苞徳塾資料	No. 545
区分	証問題
タイトル	柳谷素靈の証に関する定義
著者	八木素萌
作成日	1998.08.03

柳谷素靈先生は『鍼灸医術の門』の中で、

証とはこのように生命に根ざすものであり、治療の眼目とするに足るものをいう。「生命に直結する、生活体の現わす全体総合的反応としての症候群中の主役」が証である。漢方医大塚敬節先生は、「証とは単なる病状の総合でなく病の理念的表現である、病者の症候群を『証』と考えると『証』の把握が愈々困難となる。『証』は選択的であり、理念的である。写實的病状の羅列ではない、病状の最も大切なものの把握である」といわれている。このように、治の為に、その眼目とする根本を活かす為に、部分を捨象する理論であり、法則である。

従って古書には写實的羅列的な病状を記さずして、治療の眼目として把握されねばならぬ『証』を示してあるのである。従って我々は『証』を決定することによって治療方則が立つのである。ここに古法鍼灸の本質的な真髓があるのである。

と述べている。この論に続いて、

我々は証によって、陰陽虚実寒熱内外を決定し、これを五臓六腑経絡経穴へ還元し治療できるのであり、これによって、主治穴の配合を必然的に理論的に決め、後は補瀉の手技を行えばよいのである。

と記述している。また、

切診は脈診のみではない。腹診、背視、四肢経絡診が含まれ、手指感覚によって、動気、痞塊癥瘕、瘀血塊、硬結、壓痛、知覚過敏、陥下無力、溢隆、緊堅、血絡横居、脊椎凸出、陥凹、左旋右旋、左轉右轉等の異常を知ることにより、陰陽虚実を辨じ、臟腑経絡のいずれの病なるかを知らんとする診法なのである。

と述べている。